

「平成28年度 気になる子どもの保育研修会」報告書

【期 日】平成28年11月10日（木）

【会 場】マリトピア

【主 催】佐賀県保育会

【参加者数】132名

【内 容】

研修1 「基調報告」 10:00～10:20

指山 健次郎 氏（佐賀県保育会会長）

研修2 「乳児期・幼児期の運動発達」 10:30～12:00

講師：松尾 厚 氏（佐賀県療育支援センター あそしあ

研修・療育課 主任理学療法士）

研修3 「気になる子どもの理解と支援」 13:00～16:00

講師：藤田 一郎 氏（福岡女学院大学 人間関係学部 子ども発達学科 教授）



研修1『基調報告』

指山 健次郎 氏（佐賀県保育会会長）

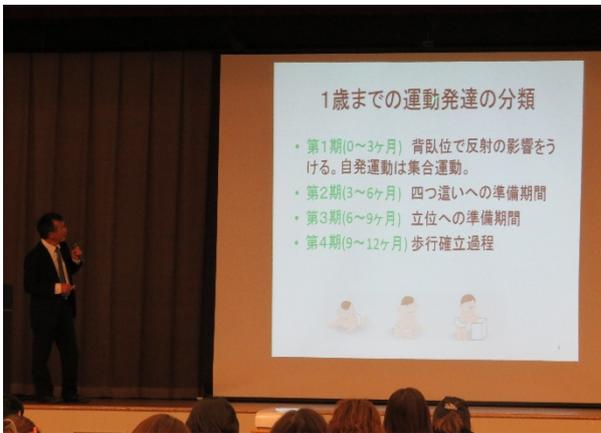
1. 佐賀県保育会とは
2. 保育を取り巻く状況
3. 佐賀県の取り組み事業
4. 参加者の皆様へ



研修2『乳児期・幼児期の運動発達』

講師 松尾 厚 氏 (佐賀県療育支援センター あそしあ)

研修・療育課 主任理学療法士)



◎12ヶ月までの運動発達の持つ意味

○運動発達の原則

- ・頭部から尾部に向かって発達する。
- ・粗大運動の発達から巧緻動作の発達へ進む。
- ・近位関節から遠位関節に向かって発達する。

⇒今どこまで発達が進んでいるかをつかんだ上で実際の保育をした方が効果的。

○1歳までの運動発達の分類 (ボイタによる)

- ・第1期 (0～3ヶ月) 背臥位で反射の影響を受ける。自発運動は集合運動。
- ・第2期 (3～6ヶ月) 四つ這いへの準備期間。
- ・第3期 (6～9ヶ月) 立位への準備期間。
- ・第4期 (9～12ヶ月) 歩行確立過程。

⇒第2期～第3期は人間として生きていくための基本的な部分が育っていく期間。

“四つ這い”はこれからの人間発達をしていく意味ではとても重要なポイント。将来、より手先が器用になるための基礎が育つ。血流を高めて脳を刺激し、前頭葉の活性化が進む。“四つ這い”の時期が短いと自分の体を手で支えられず、怪我が多い。

◎運動と感覚の関係

・感覚（入力）

外部からの刺激（触覚・視覚・聴覚など）の感覚情報を大脳に伝える。



・運動（出力）

大脳は感覚情報をもとにして運動を企画し、正しい運動をするように筋肉に命令を出す。



・感覚（フィードバック）

正しい運動ができたかどうかを判断し、間違っていれば修正をかける。

⇒発達障害の子は感覚(入力)から運動(出力)への脳の通路が繋がっていない為、正しい運動を行うだけの情報が伝わらず、情報不足のまま運動してしまう。感覚面の発達をしっかり促してあげることが大切な要素になる。

○感覚の種類

・前庭感覚・触覚・固有感覚（関節覚と筋収縮の調整）の3つが基本感覚。

⇒発達障害の子や気になる子はこの感覚が悪い子が多い。幼児期ではこの3つの感覚をいかに伸ばせるかが大切。聴覚・視覚・嗅覚・味覚の発達の上台。

⇒正しく働いてくれることで運動を上手にこなしていけるようになる。一つでもつまずいたり鈍くなったり過敏になったりしてしまうと、他の子と同じように遊ぶことができなくなる。そうならないように出来るだけ早いうちにひずみがないかを見つけて、正しい遊びをさせてあげると遅れや問題点が少なくて済む。

○3つの感覚を伸ばす遊びの紹介

- ・前庭感覚の発達を促す遊び。
- ・眼球の動きの発達を促す遊び。
- ・触覚の発達を促す遊び。
- ・固有感覚の発達を促す遊び。



◎まとめ

- ・運動発達の持つ意味を知ることで、総合的に子どもの発達状況を知ることができる。（どのあたりからつまずいているのか）。
- ・発達年齢に合わせた遊びをすることで、運動発達を促すことができる。
- ・正しい運動発達を促すためには、感覚情報を正しく入れることが大切になる。
- ・子どもの笑顔をたくさん引き出そう。子供の育ちの根っこの部分を育てよう。

研修3『気になる子どもの理解と支援』

講師 藤田 一郎 氏 (福岡女学院大学 人間関係学部 子ども発達学科 教授)



◎気になる子どもの理解と支援

「子どもの行動を観察して、その子の特徴や気持ちを理解し、成長発達を促すために支援できることを親とともに考えましょう。」

- ・ビデオ視聴 (0歳児からのメッセージ) より
ストレンジシチュエーション法
親子の愛着行動を評価して、愛着パターンを分類。
(安定型・回避型・アンビバレント型)
- ・ビデオ視聴 (ロバートソンフィルム) より
乳幼児を人に預けるときに気を付けること
親との別離 (愛着対象の喪失) がトラウマにならないように。
- ・ビデオ視聴 (光とともに…自閉症児を抱えて)
- ・発達障害とは・自閉症スペクトラム…発達凸凹が大きい。
対応として、本人が得意な事、できそうなことをする環境を作り、だんだん苦手な事を練習していく。(特別支援教育)
- ・発達障害のあるこどもへの対応
⇒・座席の位置を工夫する。声掛けはわかりやすく短い言葉で。短時間で区切った指導。
良い行動はその場ですぐに褒める。
- ・発達障害を持つ保護者への養育指導
⇒・最も大事なものは、本人の特徴・個性として受け入れる「需要」の気持ち。
- ・社会性の発達支援

- ・ADHDの対応
- ・小児心身症の理解
- ・気になる行動（言葉が遅い・人見知りが激しい・指しゃぶり、爪かみ・チック・カミツキ・自慰行為・自傷行為）
- ・保護者が気になる行動を訴えた際の対応
- ・育て直し療法、あまえ療法⇒困ったとき、甘えてくるから受け入れる。
- ・子どもの心をつかむ聴き方・話し方
- ・カウンセリングのコツ
- ・子育てに大切なこと
- ・保育に携わることの価値
- ・保育者の心構え
 - ⇒子どもを叱らないがまん・親と子の両方の幸せを考える・最善を尽くすことに喜びを
- ・前向き子育てプログラム トリプルP（九州では、佐賀市で初めて取り組む）
 - ⇒親の自信・意欲の向上、育児不安解消、児童虐待の予防、発達障害の早期支援、保健師・子育て支援従事者に役立つ。
- ・前向き子育てのポイント
- ・子育て技術
 - ⇒子どもと建設的な関係をつくる・好ましい行動を育てる
 - 新しい技術や行動を教える・問題行動を取り扱う
- ・虐待について
 - ⇒虐待が深刻化する前の早期発見・早期対応が必要
- ・子育て支援による子ども虐待の予防
 - ⇒育児ストレスを減らしてあげること。親子の愛着を育むこと。

◎効果及び評価

生まれてからの運動発達の重要性、前庭感覚・触覚・固有感覚（関節覚と筋収縮の調整）の3つの基本感覚が正しく働いてくれることで運動を上手にこなしていけるようになることなど、運動と感覚の密接な関係を学んだ。今どこまで発達が進んでいるかを踏まえたうえで発達年齢に合わせた遊びを通して子どもの笑顔をたくさん引き出していきたい。

また、気になる子に対して、精神的に安定して育つためには子ども自身が受容され、愛されているという安心感が必要であり、意欲を育てる前向きな関わりが大切であることを学んだ。保育士として子どもの行動を受け止めきれず困っている保護者の不安を取り除き支援していくことの重要性を再認識した。

（文責：鳥栖市立保育所下野園 倉成 光子）

